



TITLE:

## ボヨウ王國の成立と性格

AUTHOR(S):

田村, 實造

---

CITATION:

田村, 實造. ボヨウ王國の成立と性格. 東洋史研究 1951, 11(2): 91-110

ISSUE DATE:

1951-03-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/138924>

RIGHT:

11/2 (S. 26)

## ボヨウ王國の成立と性格

田 村 實 造

東アジアの歴史を概観するとき、モンゴリアを中心とする北アジア世界には、古來二つの國家類型がみられる。一つは遊牧國家型と他は征服王朝型とである。

本論文では征服王朝型の祖型として、セシビ族のボヨウ氏によつて建てられた諸王國(285-110)をとりあげ、これら王國の形成と國家的性格とについて考察した。

ボヨウ王國の成立過程においては、前燕國を中心に、その後につづいた同族の後燕・西燕・南燕の諸王國の政治的推移を考證した。

つぎにこの王國の性格については、主として前燕王國をパターンとして考察した。すなわち、前燕國が遼東・遼西地方(南滿洲・熱河地方)に占據していた時代は、半牧半農の部族國家であつたこと、その後北シナに移つた燕國時代は準漢族國家として、國家の基底を農業におきかえるに至つたことを論じた。このような國家的性格の變化は、中國人およびその社會や文化と密接な關係がある事を強調した。

### 目 次

- 一、北方アジア世界における國家類型
- 二、セシビ遊牧國家の形成と分裂
- 三、ボヨウ王國成立の過程
- 四、ボヨウ王國の性格
- 五、むすび

## 一、北方アジア世界における國家類型

われわれがアジアの歴史を通觀するとき、北方アジアにおける歴史的發展の過程に二つの國家類型があることを認めるであらう。一つは遊牧國家型と、いま一つは征服王朝型とである。

遊牧國家型とは、キョウド族やトルコ族あるいはウイグル族などにみるように、始終モンゴリアを活動舞臺としたもので、かれらはイラン系・モンゴル系・トルコ系のいずれをとわず、その國力發展の經濟的基底を、牧畜のほかに必ずトルキスタンの西域諸國を征服して、東西交通路の獨占による陸上貿易の利得におくのが定石である。したがつてこの型に屬するものは、中國に對しても一時的に侵入して人畜を掠奪することはあるが、かれらの全部族をあげて中國本土に移住することはなかつた。もつとも、このように定義めたことをいうと、チンギス・カーンのモンゴル族を反證とする人があるかも知れない。しかしはじめ太祖太宗の時代モンゴル族が中國に臨んだのは、當時かれらの世界征服の順序からみれば最後の段階である。かれらは、その遊牧國家の國力發展の基底を、牧畜から農耕に求めた必然の歸結として、中國に進駐したものでは決してない。それゆえ、かれらが中國にのぞむ態度をみても、中國を牧場化しようとしたり、あるいは北方の遊牧的封建制をそのまま採り入れて、漢族を支配しようとしたり、全く遊牧的立場をとつてゐる。ところがフビライ・カーンが元朝を建てると、本格的に中國に君臨し中國風の統治策をとつたが、この王朝はモンゴル族の立場からいえば、むしろ中國化したカーン國、すなわちフビライ・カーン國とみられるであらう。フビライが弟のアリブカに對抗して長城地帯および北部中國地帯に帝位に即いて以來、かれはもはや眞のいみでは純正モンゴル帝國の後繼者とはみなされなかつた。元朝はこの時からモンゴル族と漢族との合作に成る牧農國家として發足し、やがて北京に都すると、その國力發展の基底を農耕におく國家、いわゆる中國征服王朝に變質していつたものといえよう。

第二の征服王朝型ともいふべきものは、歴史上の事例からみれば、いまいつた元朝のほかにボヨウ王國、北魏、遼、金、清などの諸王朝であるが、これらのうち元朝をのぞけば、何れも興安嶺東方のシラ・ムレン流域や松花江流域、遼河流域に興起了た部族を主體としている。かれらはモンゴル系にしても、ツングース系にしても部内を一統すると、滿州中部とか熱河地方あるいは長城地帯を根據として、漢族その他の農耕定住民を集團的に領内に移し、ここにまず牧農的國家を形成する。そしてかれらは、これら農耕民の生産力によつて國力を増強し、やがてその必然の結果として、中國本土に移り住み、遂に國家の重心をここにすえることになる。こうしてその多くは中國に入りこんだ後、時の経過とともに經濟的にも文化的にも漢族から壓倒され、民族そのものの滅亡さえも招來するのが常例である。それはかれらが國力發展の基底を農耕に求め、遊牧的または牧農的國家から農業國家に變質した結果にほかならない。

ところが問題はまだのこる。われわれはこれまで北方民族側のみに立つて征服王朝を考察したが、つぎに立場をかえて、これら北族征服者を受け入れた中國社會側についてみなければならぬ。より具體的にいえば、中國社會のどの階級のものが征服者を迎え入れ、これと合作して征服王朝的權力を作り上げたのかということである。この點についての詳しい論述は別の機會にゆずることにして、ここではただ結論的につぎのことだけをいつておこう。北魏にしても、遼、金、元、清にしても、これらの諸王朝を迎え入れ、これらと結托して新たな權力を構成したものは當時における下からの壓力に抗しかねた官僚および豪族郷紳としての地主階級であつた。この點征服王朝は、各王朝末期の農民一揆的叛亂とは全く對立する關係に立つものである。本稿ではこの點には、これ以上ふれないことにして、ただボヨウ王國の成立過程を考慮しつつ、古代北方民族のうち、いわゆる征服王朝型に屬する最初のものであることを指摘するにとどめたい。

## 二 センビ遊牧國家の形成と分裂

キョウド（匈奴族）がモンゴリアに勢を誇つた期間は二百五十年あまりにもなるが、やがて南北の二集團に分裂して衰亡した後、これに代つてモンゴリアを征服したのはセンビ族であつた。

センビ族はモンゴル系の一部族で、史記や漢書の東胡民族に屬し、東胡の後といわれるウガン（烏丸）とともに、東モンゴリアのシラ・ムレン流域から興つた部族である。はじめ後漢の和帝のところ（九一年ごろ）北キョウドが漢の遠征軍に追われて西方のイリ河流域に逃げ去つた後、センビ族はモンゴリア一帯に據つて遊牧したが、しかし當時なおかれらには全部族を統合する中心勢力はなかつたようである。ところが二世紀中ごろダンセキカイ（檀石槐）という英雄が出ると、全センビ部族を統一し、さらにかれは領土をひろげてキョウドの全故地を勢力下に收めた。後漢では大いにおそれ、かつてウガン族や南キョウド族にもちいたような懷柔手段をもちいたが、とうてい北方からの壓力を防ぐことはできなかつた。

ダンセキカイはその廣大な領域を統治する方式として、領内を東部・中部・西部の三大部に分かち、そこにおの大人のをおき、自らはその上位にあつて諸部大人を統帥している。王沈（魏書）によると、東部は右北平（熱河省平泉附近）から遼東（遼陽）までの二十餘邑にして、彌加・闕機・素利・槐頭の四大人が統べ、中部は右北平以西、上谷（懷來）までの十餘邑にして、柯最・闕居・慕容の三大人が統率し、また西部は、上谷より敦煌および西北の烏孫に接するまでの二十餘邑にして、置鞬・落羅・日律・推演・婁務游ら五大人によつて統治されている。そして自からは、その本營を當時の馬邑郡管内、高柳（陽高の西北）の北方三百餘里、彈汗山（張北縣附近）においていたといわれる。

してみると、センビ帝國の主體をなすセンビ部は、漠南にあつて多くの部族に分かれ、それぞれ選舉制による大人を有しており、ダンセキカイはかような多數の部族集團を、一つの統制ある組織體にまで作りあげて、一應遊牧國家の形成に成功したものである。

さて靈帝の光和年間——通鑑は光和四年（一八二）という——ダンセキカイが四十五才で死ぬと、その子孫が相ついで首長

となつてゐる。すなわちセンビ族も、このころから固有の選舉制はくつがえされて、大人（部族長）の位は世襲制になつてきたわけであるが、しかしダンセキカイの子孫には、しつかりした人物が出なかつたため、部衆はしだいに離れ去り、やがて中部センビの中から出たカビノウ（軻比能）という一大人によつて代わられることとなつた。この人は魏志本傳によると、センビ族中の弱小部族から出たが、もちまへの勇健さと公平な裁決力により衆望をえて部長となつたのである。しかもその部は長城に近かつたため、後漢末の中國本部の内亂を避けて投降してくる中國人が多く、かれはこれらの人人から新式の兵器や鎧楯などの武器類の製法、あるいは用兵戰術を教えられ、まだ漢文字をも學んでゐる。もつともカビノウはダンセキカイに代わつたといつても、その勢力の及ぶところは、中部センビに限られていたようで、ダンセキカイの子孫は、いぜん東部に勢力を有していたので、自然これらと拮抗する形勢にあつた。ところが魏の青龍三年（二三五）にカビノウは幽州刺史の王雄に殺されたため、センビの部族國家は忽ち幾つかの部族集團に分散してしまつた。

### 三 ボヨウ王國成立の過程

ダンセキカイ、カビノウのち、分裂したセンビ族のうちから、やがて三世紀の半ばすぎになると、しだいに勢力を振へはじめた三四の部族があつた。すなわち、大遼河下流域いまの義縣・錦縣方面にあたる昌黎郡を根據とするボヨウ（慕容）部<sup>①</sup>、シラ・ムレン流域（遼東郡の塞外）による宇文部。その南方遼西郡の地による段部。これらの西方、チャハル南部より歸化城・盛樂（ホリングル附近）方面にわたるタクバツ（拓跋）部などである。なかでもボヨウ部とタクバツ部とが、その後長く漢民族と深い交渉を有したため、中國史の上でも有名である。

さて、ボヨウ部を歴史的部族にまで高めたのは、ボヨウ・カイ（慕容廆）という人である。晋書卷一〇八載記八にみえる傳によると、曾祖の莫護跋というものが、魏のはじめ（三世紀初め）部民を率いて遼西に來住し、魏軍の公孫氏（マンシウ）の

討伐にしたがつて戦功をたて、はじめて棘城の北におちつくことをえた。その子木延、孫の涉歸（カイの父）は、ひきつづき柳城（朝陽）の守備に任じ、その功により鮮卑單于に封ぜられている。なお涉歸のとき、いかなる理由からか判らないが——馮家昇氏は宇文部の壓迫をさけたものという（慕容氏建國始末、禹貢三ノ一一）——遼東方面に地盤を移したようである。やがてカイが部民に迎えられて立つと（晋の武帝、太康五年、二八五）まず當時中部マンシウに國した扶餘國を攻撃し、ついで南方の晋國に向つては、ときに遼西地區に入寇し、ときに使節を送つて服屬するなど、侵略と和平の兩手段を巧みに使い分けながら、部内の充實をはかつてゐる。他方かれは段部とも婚を通じて親善をはかり、やがて二八九年（太康十年）には遼東から徒河の青山に移つた。さらに二九四年（元康四年）には棘城に居をかえたが、ここでは部民に農桑を教えたりして定住的營みをなし、中原の晋王朝にならつて國家の制度を整備することに努めている。以上によつてみると、ポヨウ部は三世紀前半ごろ遼西に入り、一旦朝陽附近にいたが、やがて遼陽の北方に移り、ポヨウ・カイの時青山（義縣）に據り、さらに四度び移つて棘城（錦縣北方）に居を定めたこととなる。かれらはこのころから牧畜とともに農耕をも營み——農耕はかれら本族というよりも、主としてその領内に吸収した農耕民族によつて行われたものであろう——また統治の面においても、やや國家らしい經營を行ひ始めたようである。

たまたま三〇六年（永嘉初年）遼東郡太守（龐本）が私怨によつて東夷校尉を殺害したことに端を發して、周邊の一部センビが背叛したが、國內の兵亂になやむ晋朝としては、手のほどこしようもないままに、兩三年も放置していた。そこでカイは、勤王を名として遼東に出兵し、叛亂のセンビ部を鎮めて遼東を復し、部民を領内に移した。このため遼東には、やはり遼東太守や東夷校尉や平州刺史などの晋朝の官吏がいたが、もはや昔日の威權はなく、遼東郡内におけるポヨウ氏の勢力は、一段と伸張した。かような勤王に名をかつて出兵したり、また晋朝のために遼東郡を復興したりなどする、いわゆる大義名分的行爲は、カイの子カン（鞠）の方寸から出たものと考えられる。カンはつねづね父を説いて、中國の天子を尊び、漢人たちの

心をうるゝことが大業をなすゆえんであることをすすめている。このためカイは、晋末中國内地の騷亂をさけて來投する流亡の漢人を收容して、郡縣を建置したり、あるいはかれらを政治の顧問としたり、また一門子弟に學問を學ばしめたり、あるいは謀主としたりなどしている。<sup>⑥</sup>これらからみても、當時遼西遼東地方におけるボヨウ部の勢威は、もはや動かし難いものとなつていたこと、そしてコウの志が凡庸でなかつたこと、またかれ及びその一族支配者たちが、漢人漢文化に對して深い理解力をもつていたこと、などがうかがわれる。

そのうちに遼東一郡が、完全にカイの手中に入る機會が到來した。それは西晋が滅んで、江南に東晋が再興すると、その騒ぎに乗じて、東夷校尉の崔毖が、カイの威望をねたんで、自ら遼東・遼西の領有を企て、三一九年（太興二年）高句麗・宇文部・段部の三者を誘うてボヨウ部を攻撃してきたことである。しかし崔毖はかえつて敗北し、高句麗に亡命した。以來ボヨウ部は高句麗と直接國境を接することとなつた。三三三年カイは卒したが、後にボヨウ部によつて興された大燕國の基礎は、主としてカイの一代に築かれたといつてよからう。

カイの後をうけてボヨウ部長になつたのは、第三子のコウ（皝）であつた。かれは雄略な素質を具え、カイの在世中から諸方を征伐し、多くの軍功を立てている。またかれは經學を尊び、天文にも通じる文化的素養を具えていたといわれるが、これはカイによつて擧用された中國の人材の教導によるものである。

ところがコウが位をつぐと、當初その兄弟たちとの間に争いが起つた。すなわち庶兄の翰、弟の仁、昭らと不和になり、一時部内は動搖した。中でも多年遼東の經營に従事した仁は、この地によつてコウに對抗した。これに乗じて近隣の宇文部および段部らのセンビ諸部は、しきりに義縣や朝陽などの要地を侵したが、コウはよくこの危機を切り抜け、かえつて三三四年（咸和九年）には、みずから遼東を征して襄平（遼陽）を確保し、この地の豪族を棘城に徙して、和陽、武次、西樂の三縣を新設している。これに勢をえたかれは、海路によつて南部遼東に入り、平郭（蓋平附近）にある仁の本據を急襲して、仁を捕



殺した。遼東の叛亂が鎮定したのは、資治通鑑卷九五によると三三六年（咸康二年）正月であるから、仁の叛亂は足かけ四年に及んでいる。そこで、コウは、部下たちのすすめをうけ、その翌年王位に即き、燕王と稱したが、東晋から正式に認められたのは數年後（咸康七年）である。

このようにコウの勢力が伸びて行くと、やがて南の大勢力段部（段遼）と本格的に衝突することとなつた。さきにも一言したように、段部はセンビ族中でも、もつとも南部に位し、いまの熱河から北シナの北京天津および山西北部にかけて勢力圏を作つていたが、<sup>⑦</sup>ボヨウ・コウは中原に國する後趙の石虎——後趙の建國者石勒は帝位についたが、三三三年に卒したため、これに代つたのは部將の石虎（石季龍）であつた——に援助をもとめ、南北より挾撃して段部を仆した。そこでコウは北シナの三万余戸を柳城に移して宮殿廟宇などを建て、地名も龍城と改め、三四一年（咸康七年）<sup>⑧</sup>にはここに都した。かれはまた東方の高句麗に對しても征伐の軍を起し、これに徹底的打撃を與えた。<sup>⑨</sup>高句麗を屈服させたコウは、三四四年には北隣りの同族宇文部を亡ぼし、その部人五万余部落を領内にうつした。

以上のように、ボヨウ部はカイとコウの二代に遼西・遼東はもとより、北方はシラ・ムレン流域より中部マンシウの農安方面にまで及び、南方も長城をこえて天津、北京より山西の北部を包含するマンシウ、東部モンゴリア、北シナに跨る大勢力を築き上げたのである。そこで三四八年コウの後をうけて燕王となつた三男のシュン（僞・雋）は、その翌年あたかも中原の後趙國においては石虎が卒して内亂が勃發したのに乘じ、遼西の龍城（朝陽）から薊城（北京）に本據を進めた。そしてかれはしだいに後趙國の領域を犯し、三三二年には、石虎の部下冉閔が後趙をうばつて建てた魏國を亡ぼし、遂に中山（河北省定縣）に帝位につき、國を大燕といい、後趙の國都鄴（河南省臨澤縣）に遷都した（三五七）。こうしてボヨウ部は第三代シュンの時代に國の重心を遼西から中國北部にうつしたのである。ちなみに大燕國は、のちに同族によつて後燕、南燕などの諸國が興されたため、便宜上前燕國とよばれる。なおシュンは、部將をつかわして北方のトルコ系諸部族（丁零・勅勒など）を撃

ち、また高句麗の貢をも納れていることからすれば、北方、東北方に對しても、勢力をのばしたことがわかる。

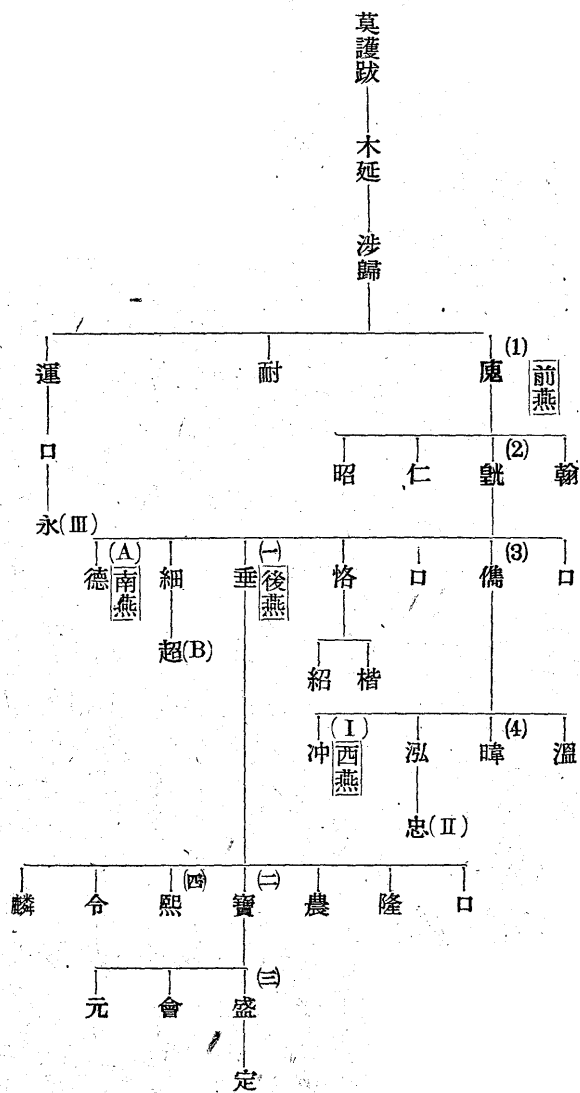
三六〇年シユンが卒すると、第三子イ（暉）が年少でついでだが、かれは河・洛地方の動亂に乗じて出兵し、洛陽を陥れている。これによつて前燕の版圖は、河北、山東、山西、河南にまで擴大し、江南の東晋と西方の前秦——この國はチベット系の酋長符健が三五年長安に自立して建てた國家である——と直接境を接することとなつた。したがつて、當時の中國を大きくみてみると、北シナには東方の前燕と西方の前秦とのほかに、西北の河西地方にある涼州（甘肅）——その頃姑藏と俗稱されていた涼州を中心に、漢族出身の張氏が前涼という獨立國を建てており、これを加えれば、江南の東晋とともに、まさに四王國對立という形勢にあつた。なかでも前燕、東晋、前秦の三國は相鼎立しつゝ互に虚實をうかがつていたのである。

ところが東晋の勇將桓溫は、たまたまボヨウ・イが年若い上に凡庸であり、かつ一族間に内亂が起つたのに乘じ、北伐を敢行して前燕にいどんだ。このとき前燕は、前秦王符堅にすがつて東晋の侵入軍をしりぞけたが、すでにその國の實力を看破した符堅は、前燕の背約を口實に大軍をつかわして國都鄴を陥れ、イをとらえて王公以下のセンビ族四万餘戸を長安につれ歸つた（三七〇）。殘餘の一部は舊地遼西の昌黎、龍城方面に退いて、ここに前燕はカイ以來四代八十五年にして滅びることとなつた。

しかし、その後十數年をへて三八四年になると、さきに内訌のぎせいとなつて前秦に亡命していた一族のボヨウ・スイ（慕容垂）が符堅の淝水の敗戦に乘じ、中山（河北定縣）に即位して後燕國を稱し、河北、山東、山西、河南北部、江蘇北部、遼西、遼東を領有して、前燕時代にもまさる勢力をもちかえしている。またイの弟冲は陝西省阿房城（咸陽縣）によつて即位し、西燕と號したが、三九四年後燕に併合された。後燕は、その後五代、二十五・六年間つづいたが、四〇九年に滅ぼされた。

なお、後燕の末年にあたる三九八年、一族のボヨウトク（慕容德）は廣固（山東省青州）によつて南燕國と號し、二代十二年の命運を保つた。

ボヨウ部の系譜略



## 〔註〕

①ボヨウ部の慕容の二字は、白鳥博士によれば、蒙古語Bayan(富む富者)の音譯であらうと(東胡民族考、史學雜誌第二二編一號)。古來、大凌河は白狼水とよばれているが(滿洲歴史地理第一卷一四六—一五〇)、この白狼もおそらくBayanに近い音ではなかつたかと思われる。もしそうだとすれば、この部の名は白狼水よりえたものかも知れない。

②棘城 棘城の位置については、通典卷一九六北狄三、慕容氏の條には棘城之北に注して、今柳城郡之地といい、同じく卷一七九營州柳城郡の條には、棘城を郡城の東南一七〇里にありという。また魏書卷一〇六上、地形志昌黎郡・龍城の條下には、柳城・昌黎・棘城と列記するところからみても、柳城と棘城とは同一地ではない。いまその位置を確實には比定しえないが、滿洲歴史地理第一(236頁)は錦縣附近にあて、市村博士(東洋史統)や前引の余遜氏は、義縣附近と考定し、楊守敬の晋地理志圖には、義縣の北に置いてゐる。いまは錦縣の北方とみておきたい。

③晋書卷一〇八慕容廆の傳あるいは十六國春秋、前燕錄によると、涉歸が死ぬと(太康四年二八三)その弟の耐(資治通鑑は刪に作る)が、ひそかに位をうばい、カイを殺さんと企てたので、かれは禍をきけて遼東(徐郁家)に亡命した。やがて二年のち耐は部民に殺されて、ついにカイが迎えられることとなつた。資治通鑑は、これを太康六年のことという。なお通典卷一九六慕容氏傳によれば、涉歸に吐谷渾とカイの二子があり、庶兄の吐谷渾は西方の河湟之間に移つたといひ、耐についてはふれていない。吐谷渾については通鑑(九〇)にもみえる。

## ④ボヨウ部と扶餘國

ボヨウ・カイが扶餘國を攻撃したのは、晋の武帝太康六年(二八五)であるが、この攻撃によつて扶餘は國都を陥れられ、國王依慮は自殺し、子弟は多く沃沮に走るといふ悲運にあつてゐる。しかし、やがて晋の東夷校尉(遼東探題)の後援によつて、わづかに國を復興することをえている。當時扶餘國の境域としては、三國時代と大してかわらず、農安附近を本據に、方二千餘里を領有したといへば、滿洲歴史地理第一(230頁)にもいうように、だいたい北は松花江から、南は開原の北方において魏の玄菟郡に接し、鴨綠江・松花江の分水嶺によつて高句麗とかざられ、また松花江と牡丹江・豆滿江の兩江との分水嶺をもつて挹婁族の住地につらなり、遼河と嫩江とをつらねる一線をもち、センビ族と接してゐたと思われる。したがつて、ボヨウ部は涉歸が遼東へ移つてから、カイのこの時まで、主として遼陽の西北方、遼河以西の、いまの邊柵の内外附近にあつて扶餘國と境してゐたものと考えられる。なお注意すべきは、周知のように農業國であつた扶餘を征伐したことによつて、ボヨウ部の農耕化が大いに助長されたであらうことが想像される。

## ⑤徒河の青山

徒河という地方にある青山の意で、徒河は漢以來置かれた縣名であつて、遼西郡ときに遼東郡に屬した。その位置は、だいたい錦縣の西北に比定される(余遜、漢魏晋北朝東北諸郡沿革表、歴史語言集刊第六)。青山とは、資治通鑑註には、柳城郡すなわちいまの朝陽の東百九十里にありといふ。現在の義縣の地に比定される。

⑥晋書卷一〇八、載記八慕容カイの條によれば、多數の士大夫や儒士がカイの幕下にあつて、それぞれの立場からかれを助けていたこと

がわかる(十六國春秋前燕錄をも參照)。また資治通鑑には、會稽の朱左車や魯國の孔纂、泰山の胡母翼をはじめ漢人數万家の來投を、王浚が後趙の石勒に亡ぼされた頃、すなわち建興二年の條に挿入している。

⑦段部については、晉書卷六三段匹碑の條に、段遼のころの勢力を記して

據有遼西之地、而臣御晉人、其地西盡幽州、東界遼水、然所統胡晉可三萬餘家、控弦可四五萬騎、而與石季龍遞相侵掠、連兵不息、竟爲季龍所破、徙其遺黎數萬家於司雍之地云云

#### 四 ボヨウ王國の性格

以上ボヨウ部によつて建國された前燕をはじめ、後燕・西燕・南燕などの諸王國の政治的推移をのべたが、つぎにこれらボヨウ王國とくに前燕國を中心にその性格を考察してみよう。

まず、ボヨウ王國はセンビ族に出自するとはいいながらも、これまでみてきたキョウド族のダンセキカイの部族などが牧畜狩獵を主とし、たまに一部のものが副次的に農耕を営んでいたのとはやや異り、この國はすでに遼西時代から、だいたい半牧半農に移行していたと考えられる。そして、この部は本據を北シナにうつすと、準漢族國家として國の基底を農業におきかえた。したがつて、その王國の性格も、北方的のものからしだいに中國のもののへ變化している。それゆえ、この國を考察するにあつても、便宜上ボヨウ部が遼東・遼西にあつた時代と、華北にのりだした燕國時代とに分つてみる要がある。

#### 遼東・遼西時代

前節でものべたように、この部は三世紀の初めすでに遼西に入りこみ、朝陽・義縣方面に遊牧している間に、しだいに中國の風にそみ、一部では農耕的生活も営みはじめている。その後一時、遼陽の北方に根據を移しているが、

という。

⑧資治通鑑卷九七には、咸康八年十月のことという。

⑨ボヨウ・コウは咸康八年(三四二)——載記に七年とあるのは八年の誤り——鴨綠江畔の國都、丸都城(いまの輯安)を攻略し、國王の父(乙弗利)の尸や、その母妻および男女五萬餘人を掠め、宮寶を焚毀している。このため翌年國王は臣と稱し、その弟を遣わし朝貢している。なお、ボヨウ部と高句麗との紛争は、その後もつづいているが、兩者の關係については、池内宏博士、晋代の遼東(帝國學士院記事、第一卷一號、昭和十六年刊)を參照されたい。

そのころ遼東は晋の直轄下にあり、ことに遼陽には東北探題として東夷校尉が駐在し、遼東における軍事・政治および文化の中心をなしていたこととて、かれらの漢化的傾向は、いつそう助長されたことであらう。晋書卷一〇八、慕容廆傳に、

涉歸（ボヨウ・カイの父）は柳城（朝陽）の守備を全うするの功によりセンビ・ゼンウ（鮮卑單于）に拜せられ、邑を遼東の北にうつす。ここにおいて、ようやく諸夏の風をしたらう

といっているのも、ばくぜんとながら、かれらの中國文化に對する消息を伝えるものと思われる。

つぎのカイの時代になると、漢文化の洗禮をうけたためか、かれらの態度にはややもすれば中原國家への對抗的な様子がうかがわれる。たとえばカイが晋室から鮮卑都督を拜したとき、士大夫の威儀をととのえて東夷府に敬意を表しに赴くと、東夷校尉（何龕）が警護を嚴にして引見したため、カイは「主人禮を以てせず、客また何をかなさん」とて、直ちに軍服に身を固めて、これに應じた（晋書同上）とあるのは、カイがすでに中國の禮俗に通じ、中國士人の輕侮に對しては、強い反撥心を以てのぞんだことを示すものである。われわれは、かれのこの態度のうちに、中國なにするものぞという不屈な氣概をくみとりうるであらう。

また晋の懷帝が平陽に蒙塵したのち、幽州による王浚が承制と稱して、かれを散騎常侍冠軍將軍前鋒大都督大單于に拜し、下風に立たしめんとしたときも、カイはこれを受けなかつた。これも、同じような態度によるものと考えられる。もつともかれをして、このような態度に出でさせたうらには、部下漢人の入れ智慧があつたことを知らねばならない。

カイの時代遼西（青山）に本據をうつして以來は、中原では西晋が亡んでキョウド部が支配することとなつたため、騷亂をさけて河北・山西・山東・河南地方の漢人流民が多數遼西・遼東に移住していつたようで、載記、慕容廆傳によつても、かれは、これらの多數の流亡士民を、それぞれの郷郡に應じて一定の地域に住ましめている。たとえば冀州（河北）人には冀陽郡を、豫州（河南）人には成周郡を、并州（山西）人には唐國郡を、青州（山東）人には營丘郡を新設してうつり住ましめてい

るが、このように少くとも郡を設置する以上は、かなり多數の漢人が來投したものと思われる。

そして、これらのうちから賢才能吏をあげて、もつぱら庶政を委ねている。そのうち名ある人々としては、謀主として河東の裴嶷<sup>①</sup>、代郡の魯昌、北平の陽耽らがある。股肱としては北海の逢羨、廣平（河北）の游遂、北平の西方虔、澎海の封抽、西河（山西）の宋爽、河東の裴開らがある。文才を以て樞要の地位にあるものとしては澎海の封奔、平原（山東）の宋該、安定（甘肅）の皇甫岌、蘭陵（山東）の繆愷らがある。また會稽の朱左車、太山の胡母翼、魯國の孔纂らは德望をもつて名高い。そのほか平原の劉讚は通儒として國家の尊敬をあつめ、世子のコウ（甄）をはじめ一族子弟の多くは、かれに學業をうけている。晉書載記には、ボヨウ部のこのころのさまを「於是路有頌聲、禮讓興矣」とたたえている。このことばには多少の誇張はあるにしても、ともかく青山（義縣）に移つてからボヨウ部が、主として領内に來投した漢人を通じて、一段と漢文化の攝取、中國の禮制の採用を盛んにしたことは容易にうかがいうるであらう。ただに漢文化の攝取や中國の禮制の採用のみではない。注目すべきは、いまいつたように、領内各地にあまたの郡縣を設けて、流亡の漢人を徙置したことは、ボヨウ王國の國力伸張の基底を、農耕民としての漢人の生産力に求めんとしていることがみられるであらう。

遼東にあつた東夷校尉の崔毖が、ひそかに高句麗や宇文部・段部などと結んでカイの勢力覆滅を企圖しているのは、このようなボヨウ部の擡頭を、みるにみかねたからにほかならない。しかしこの一戦は、けつきよくボヨウ部の大勝に歸し、遼東も完全にその勢力下に入ることとなつて、さらに多數の漢人が降附している。たとえば晉書載記八にみえる高瞻の傳によるとかれは叔父の隱とともに數千家を率いて幽州にうつり、のち崔毖にしたがつて遼東にいき、その奔敗後は、部衆をひきいてボヨウ部に降つた

といわれ、同じく韓恆傳にも

永嘉の亂をさけて遼東にわたつたが、崔毖の敗れたのちは昌黎にうつり、カイに仕えて參軍事を拜した

という。

これまでのべたようなボヨウ王國の方針は、カイをついだコウによつてもうけつがれ、遼東によつて叛した弟の仁の亂が平らぐと、しきりに遼東の豪族大姓を遼西の棘城附近にうつし、和陽・武次・西樂の三縣を置いている。なおコウが嗣立したときのありさまから一つの推測を加えてみると、カイとコウとの間で、ボヨウ部の王權推移の上に、一つの大きな變化が起つてゐる。もとコウの父のカイが立つたのは、部民に推戴されたといえ、いわゆる部民會議（クリルタイ）によつて決定されたものである。ついでコウが立つたとき、兄弟たちの間にはげしい争いをひきおこしているが、これは當時なお、この部の首長の繼承は一定しておらず、けつきよく實力者として遼東に勢力をもつ仁および、これに味方する他の兄弟たちと、遼西に根據するコウとが、首長の地位を争つたものとみられる。そして遂にコウが仁を仆して、遼東・遼西一圓を自己の勢力圏におさめることとなつたのである。つまりボヨウ部の王權は、これまで部民會議の決定によるという一種の民族的民主制を通じてえられたのが、いまや實力によつてえられ、部民會議の意志、すなわち北族的慣制が後退していつたことを示すものといえよう。

その後かれは、さらに後趙國の石虎と結んで段部を亡ぼし、ついで石虎をも破つて段部の故地を併せると、三たび移つて龍城（朝陽）に都し、ここに北シナの漢人三万余戸をうつしている。三十四一年（咸康七年）には、かれは王位について燕王と稱し、中國の體制にならつて國相司馬をはじめ列卿將帥を置いて、前代以來生き残りの諸功臣をこれに任命し、また自らの身邊も威福をかざり、宮殿を建て、出入には皇帝と同じ六馬の車駕を用い、あるいは妻を王后、世子を太子とよぶなど、全く天子にならつてゐる。かれはのちいくたびか龍城に宮室を増築し、あるいは學校を興して諸大官の子弟千餘人を募つて官學生とし、自らも學校に臨んで講授したり優劣を考試したりなどして教學につとめている。これらは一に、カイ以來の傳統政策をうけ、漢文化の移植、中國の禮制の採用を盛んにして、國家の威儀をととのえんとしたものにほかならない。

その半面、かれは東晋の成帝から、改めて侍中大都督河北諸軍事大將軍燕王に拜せられ、同時に諸功臣百餘人も封ぜられて



いる。このことは、かれの河北における事實上の地位が、正式に東晋から容認されたことをいみするものといえよう。率爾に考えると、このころのコウの實力をもつてすれば、あえて江南に偏在する東晋の天子から、華北における既成事實のうらづけをえなくとも、よさそうに思えるが、當時東晋はやはり中國の正統國家として、漢人にとつては尊崇の中心であつたため、ポヨウ・コウとして部下の漢人や、新領土となつた北シナの漢人の心をうる上には自らの威福をかざる以上に必要なことであつたであらう。このことは、いいかえればポヨウ王國がたとい名義上にもせよ、なお東晋の宗主權下にあつたことを語り、領内の漢人に對するカイやコウの支配權は、東晋天子の承認の下に確固づけられていたものといえよう。しかし漢人に對するかれらの支配權が、東晋の宗主權下に立つことによつてうらづけられたとはいつても、その政治的主體性の活動は東晋から制約をうけることなく、あくまでポヨウ部自らによつてなされたことは誤解されてはならない。

さて領内に收容された漢人の多くはいうまでもなく農耕に従事したであらう。そこでコウは、さきにカイによつて領内各地に設けられた華北からの流亡漢人の諸郡、成周郡・冀陽郡・營丘郡・唐國郡などを廢して、改めて渤海人のために興集縣、河間人のために寧集縣、廣平魏郡人のために興平縣、東萊北海人のために育黎縣、吳人のために吳縣を置くこととなつたが、さきに遼東の豪族を徙して置いた和陽・武次・西樂の三縣などとともに、國內には漢人を住民とする多數の郡縣が設けられ、これらの流亡漢人はポヨウ部王權の保護下に、生活の安定をうることとなつた。

そして、コウみずからも諸郡縣を巡視して農桑を勧めるなどの勸農策を講じ、一方また貧家に官の牧牛を給與して、自家私有の苑田を耕作せしめているが、苑田はおそらく支配者層としてのポヨウ一族はみな多少とも私有し、その耕作には漢人を使用していたであらう。なおこれらの苑田の課稅率は、七割ないし八割のすこぶる高率のものであつたといえ、これらの使役漢人は實質的には奴婢に近かつたものと思われる。かくしてポヨウ王國は、すでにその國內になお牧畜狩獵生活を營む北方族——本族たるポヨウ部の民や、ほかのセンビ族キョウド族など——と、もつばら農耕に従う漢族を包含して、二元的社會を醸

成せしめつつあつたことが知られる。

國家としての、このような二重性格は、その支配者の稱號にもよく表われている。たとえばポヨウ・カイは、はじめ鮮卑大單于と稱したが、西晋より鎮軍將軍・昌黎遼東二國公に拜せられ（建興中）ついで東晋元帝より使持節都督幽（平二）州東夷諸軍事車騎將軍平州牧を拜し、遼東郡公・常侍單于（侍中單于）に封ぜられている（大興四年十二月）。二重の稱號である。また世子のコウも元帝の建武初年、冠軍將軍左賢王を拜し、ついで父をつぐと、かれは、成帝から任ぜられたまに、鎮軍大將軍平州刺史大單于遼東公使持節幽州東夷諸軍事さらに使持節大將軍都督河北諸軍事幽州牧大單于燕王（資治通鑑）を稱しており、その子シユンも、はじめ安北將軍東夷校尉左賢王を拜し、燕王と使持節侍中大都督河北諸軍事幽冀并平四州牧大將軍大單于燕王を授けられている。いうまでもなく大單于是キョウドの王號であり、左賢王は單于につぐ最高の官號であるが、當時すべての北方民族は、ひとしくキョウドの官制にならつて、このような稱號を稱えていたもので、東晋としては、ただかれらの慣習を尊重して、本來の中國的官稱の中に、大單于とか左賢王の官名を添加したにすぎなかつたのかも知れないが、ポヨウ部にとつては、この大單于・左賢王などの稱號にこそ、領内における漢族以外の諸民族を統治する上に必要な權威をみとめていたものである。

燕國時代　　ポヨウ部が、華北平原に進出してきたのは、第三代目のシユンの時である。これまでのべたように、カイとコウの二代にわたり多數の漢人を國內に收容して、政治上、文化上、また經濟上にあつても、北方の部族的國家から中國的國家の體制へと移行しつゝあつたポヨウ王國は、ちょうどコウの死後、シユンが王位についた時、中原の後趙國が石虎の死後、混亂に陥つたのに乗じ、その國都鄴城を陥れた。シユンはこのとき傳國の璽をえたと稱し、三三二年（永和八年）帝位につき、國を大燕と稱し、國家の重心を華北にうつすこととなつた。

これは王權の性格に大きな變化を與えたもので、東晋の宗主權に保證されていたこれまでのポヨウ部長の中國的統治權が、

明確にボヨウ・シユン自身に轉移したことをいみし、從來領内のセンビ族をはじめとする北方族に對しては直接的であつたが、漢人に對しては東晋の宗主權に裏づけられていたボヨウ部王權の二重性が一元化して、その主體性を確立したもののといえよう。③もちろんこうなるとこれまで稱してきた大單于などの稱號もとりに去られている。あるいはとり去られたというよりも、帝號中に吸收されたとみるべきかも知れない。晋書載記によれば

建元して元璽といい、百官を置く、封弈をもつて太尉となし、慕容恪侍中となり、陽鶩尙書令となり、皇甫眞尙書左僕射となり、張希尙書右僕射となり、宋活中書監となり、韓恆中書令となり、そのほか多くのものが、それぞれ官職を授けられた。また庾を追尊して高祖武宣皇帝、眭を太祖文明皇帝となす（資治通鑑九九、永和八年にも、ほぼ同文がみえる）

と傳えている。すなわち太尉、侍中・尙書令以下の百官を設け、また父祖を追尊し、さらに妻を皇后、太子を皇太子と稱するなどまさしく中國とくに魏晋の體制に模して、その官僚機構をととのえ、もつぱら漢人をその中に吸収していくとともに、他方武力をもつて華北各地の豪族や漢人の實力者を、あるいは降しあるいは征服していることなどからみても、大燕の建國はボヨウ王國が、一應名目及び機構上、中國的國家として脱皮したことを語るものである。④

このように、國都を遼西から華北の薊城（北京）や、さらに中原の鄴都にうつして、國家の體制を中國化していくことは、他面においては、かれら北方族の舊來の部落制を破壊するにいたつたのであろう。大單于、左賢王などという北方的稱號の廢止も、これを精神上からみれば、北族の自負心を消失せしめるものである。しかしそれかといつて、燕國時代になつてボヨウ王國の民族的二元性が、社會上經濟上急に一元化、つまりかれらが全面的に漢化したというのではない。この王國內には、いぜんとして民族的には北方族と漢民族との兩者が包攝されており、のみならず、シユンはさらにすすんで北方に對しても、トルコ系諸部族やマンシウの高句麗などを服屬して、名實ともにマンシウ、東モンゴリア、北シナに跨る帝國を作りあげている。この點、すぐこれにつづく同族の北魏や、あるいは後世の遼、金などと比べると、それらの萌芽的性格が、このボヨウ

王國に存していることが認められるであろう。

〔註〕

①裴嶷については、晋書載記第八によると、はじめ兄の子開とともにカイのもとに投じると、各地からの流寓の士の多くは、ボヨウ氏がまだ草創にして勢力が弱く、いづれも去就に迷つていたので、かれは率先創業に力をつくし、四海の英才賢士を舉用して、國家の面目を一新している。またのち江南の建康に使するや、ボヨウカイの威略を東晋側に喧傳して、遼東におけるボヨウ王國の強大さを知らしめたという。

②晋書、載記慕容皝傳には

「皝在龍城」以牧牛給貧家、田于宛（通典賦稅門には宛という）中、公收其八、二分入私、有牛而無地者、亦田宛中、公收其七、三分入私（資治通鑑卷九七にもみえる）

五　　む　　す　　び

以上のべたところを結んでみると、センビ族としてのボヨウ部は、ボヨウ・カイのとき遼東・遼西に勢力をのびし、たまたま當時中國内部に起つた混亂をさけて、流亡してきた漢人や、あるいはかれらが侵略によつて強制的に移した扶餘族、渤海族、漢人らの集團移民をもつて、領内各地に郡縣を設け、ひとまず遊牧狩獵族と農耕民とを包含する牧農的王國をつくりあげている。それはいいかえると、この國が部族制國家から階級的國家へ轉化したことをいみするであろう。そしてこの王國內に成長していく社會的矛盾は、やがてこの國を中原への征服戦にかり立てるのである。

それはともかくこのような大規模な徙民は、その後もボヨウ・コウによつて行われ、遂にボヨウ・シュンになつて、國をあ

とみえ、漢人の徙民がボヨウ氏の保護下に、牧牛を支給されて、その苑田を耕作していたことがうかがわれる。これはすでに岡崎博士もいわれているように、一種の營戸であらう。（南北朝における社會經濟制度一〇三頁參照）

③もつとも資治通鑑卷九七、永和元年十二月の條に、

燕王皝以爲、古者諸侯即位各稱元年、於是始不用晋年號、自稱十二年

といえ、燕國はすでにボヨウ・コウの末年頃から、まだ自らの年號はなかつたが、東晋の年號を稱することはやめていたようである。

④元璽元年以後のボヨウ王國における將相大臣については萬斯同、僞燕將相大臣年表に詳しい。

げて北中國へ移住したのであるが、このように國力の基底を牧畜から農耕へ轉移せしめていつたところに、この國の發展があつた。そして今いつたように、農耕民が政治的に組織化されてくると、ボヨウ王國という國家のうちには、勢い遊牧の北族と農耕の漢族との性格を異にする二つの社會が一應でき上つていつた。漢族のうち知識人の多くは、門閥の如何をとわず、その個人的才能に應じ拔擢され、新國家の建設に參與している。そしてこれらの漢人は、ボヨウ氏の中原進出をも熱心にのぞんで、はたらきかけたことであろう。燕國時代になると、この國の實際政治にたずさわるものは、ほとんど漢人によつて占められ、その經濟的基礎が農耕に置き換えられたことと相まつて、必然的に國家の體制は、中國化せざるをえなくなつたのである。

がんらい、五胡時代は、北方または東北方のモンゴル系民族や西北方のチベット系民族が、その優れた武力を以て中國に侵入し、漢民族を政治的に支配した時代である。岡崎博士もいわれたように、當時の漢人とくに北中國の漢人指導階級は、武力の上でこそ劣弱ではあつたが、かれらは異族出身の實力者に協力することにより、禮制政治を中國に行わんとしたのであつた。禮制政治こそは社會上の舊秩序を維持しかれらの支配力を安定化するものであつたから。それゆえかれらは、常に異族支配者の行爲や政治性に、中國の倫理性や合理性を要請している。たとえば晋書の載記をみても、かれらがしばしば先例を中國の史實や史上の人物に求めつつ、その君主や支配者らの言動を戒めているのは、このことを語るものにほかならないであろう。このようなさまは、よくボヨウ王國の成立過程にあらわれていると思われる。

(昭和二十三年十一月人文科學委員會歷史部會講演、同二十四年十二月補稿了)

# THE EMERGENCE OF THE MU-YUNG KINGDOMS AND THEIR CHARACTER

By Jitsuzo Tamura

The author thinks that those peoples who arose and declined or disappeared in the course of history in northern Asia with Mongolia as its main theatre can be put into two distinct categories, i. e., nomadic empires and dynasties of conquest.

In the present article the author takes up the kingdoms established by the Mu-yung (慕容) tribe which belonged to the Hsien-pi people, and discusses their emergence as states and their character. First, he tries to make clear the political history of the Mu-yung kingdoms, i. e., Former Yen, Later Yen, Western Yen and Southern Yen, all of which were in kinship. Next, he considers the character of these succeeding kingdoms, taking Former Yen as a pattern.

The author concludes: (1) Former Yen had been in the stage of a tribal state, while they had been inhabiting South Manchuria and Jehol, having lived on partly nomadism and partly on agriculture; (2) it transformed itself into a quasi-Chinese or Sinicized state, depending on mainly agricultural products, when it became a kingdom established in north China; (3) such a transformation was the result of its contact, social and cultural, with the Chinese.